今月の御教え

信者に不同の扱いをするな。物を余計に持ってくると、それを大切にするようなことではならぬ。信心の篤いのが真の信者じゃ。

……金光教祖御理解　第九十四節……

解説　この御理解は「お供え物とおかげは、つきものではないぞ。（御理解　第二十三節）」や「金の杖をつけば曲がる。竹や木は折れる。神を杖につけば楽じゃ（第五十七節）」との御教えと同じく教祖金光大神様の信心の根本理念を明らかに示された御教えであります。

今日でも、寺社に多額のお供えをすれば、石柱や木版の「寄進札」に名前と金額が公示されますが、当時はなお更のこと「お供え物とおかげは、つきもの」であった事でしょう。それに対して「お供えの多い少ないによってお蔭の大小が決まるような事は決してない。お供えは、神様からお蔭を頂いたことへの、感謝の現れであり、単に金銭の多寡で計れるものではない」と諭されていますが、しかし、これほどまでに強く厳しい金光大神様の思し召しは何故でありましょうか。それは、私達は生きてゆくには、衣食住が不可欠であり、それを支える経済、即ち金銭は何よりも大切なことは当然のことであります。しかし教祖金光大神様は、私たちに、それ以上に大切なものが「神に向かう心であり、神信心による、実意、丁寧、真」であり、そのことこそが人生至上の価値であり、生死を通して大神蔭を頂く道であることを、私達信奉者に確固と示された御教えであります。